令和４年11月２～６日

海外視察報告書

自由民主党神戸市会議員団

自由民主党神戸市会米国訪問議員団の海外視察報告書

令和４年12月５日

自由民主党神戸市会米国訪問議員団　団長　　坊やすなが
河南ただかず
しらくに高太郎

自由民主党神戸市会議員団は 11 月 2 日より米国ポートランド市を訪問し、神戸市とポートランド市との MoU 再締結セレモニーと記念事業に参加するとともに、日本庭園が導入された市内諸施設（ポートランド市交通局、ポートランド日本庭園、フードイノベーションセンター、ファーンヒル・ウェットランド汚水処理施設、サマリタン・レバノン・コミュニティ病院等）を視察して庭園を活かした福祉政策とまちづくりの実態を調査した。また、オレゴン州立大学の施設である「フードイノベーションセンター」を訪問して米国における食産業の実態を把握するとともに「神戸 Sake and Food Gathering イベント」に参加して神戸の食の紹介に努め、11 月 6 日に帰国したところ、本米国訪問団の海外視察報告書を以下の通り提出する。

令和４年１１月３日

一、ポートランド市との MOU 再締結、両市プレゼンテーション

両市長による３年前に締結した MOU の再締結セレモニーに出席、同席した。MOU の内容としては、「経済とまちづくりの交流促進」との内容で、特に対象となる分野として、食、IT、ものづくり、クリーンテクノロジー、まちづくり、防災・危機管理、スポーツとアウトドアを含む、とされている。

また久元喜造市長およびテッド・ウィラーポートランド市長より、それぞれのプレゼンテーションがあり、また安井俊彦議長から、MOU 再締結への祝意と今後両市の発展への期待を込められたご挨拶があった。その後パネルディスカッション形式で司会者より「２０５０年の両市の未来は？」と問われ、久元市長からは、平和と繁栄、脱炭素を含めた気候変動の不安から免れること、そして自然との共生の中で美しい街で優しく暮らせることを願うと答えられた。その後のウィラー市長からは、「全て同感で、そして協力していきたい」と回答。そして、気候変動、文化、教育を高めたいが、特に気候変動が置き去りにされないよう共に協力出来ることを示せるのではないか、とも述べられた。

その後、ポートランド市開発局の施策、造船修理では北大西洋地域最大の Vigor 社から事業内容の説明、最後に交通局からポートランド市における交通施策と実際についてのプレゼンテーションが行われた。開発局からは、パール地区における取り組みとして、「成長境界線」で自然を守り、都市再生地区として固定資産税を地方公共団体が２０～２５年間凍結し、将来の価値を見込んで市が借り入れをする制度が紹介された。特に SouthWaterFront 地区においては、車の入れない橋を架け回遊性を向上させる取り組みやストリートカーの現状についての説明がなされ、翌日視察を行った。

ポートランド市は、全米中でも人口が増加し注目されている都市としても有名であるが、オレゴン州の特徴でもある森や自然、また農産物も豊富であることから、自然との共生の中で「美しさ」を都市施策においても重視されていることが街並みからも感じられる一方、市内にはホームレスの方が以外に多いことが驚くべきことでもあった。また私達も使用したが開発局のトイレは男女共用であり、市民も慣れれば違和感はない、とのご意見もいただき、いわゆる多様性を受け入れる土壌があることも感じられた。また先の MOU 締結後、ポートランド市から学び実行された施策の一つとして、ファーマーズマーケットがあるが、

神戸の食をいかに市民に触れてもらい結び付けるか、今後の取り組みの一つとして注視して参りたいと考えるところである。

二、フードイノベーションセンター視察

　オレゴン州立大学の施設である「フードイノベーションセンター」を市長・議長とともに視察した。食品と飲料関係の会社に特化したリソースセンターとして、１９９９年に創設され、施設概要と研究室や器具などの説明がなされた。日本が最大の相手国との事で、これまでの調査結果の蓄積が安全性を含む食産業の発展に大きく寄与していることが感じられた。

三、神戸 Sake and Food Gathering イベントに出席

神戸の食をアピールするためのイベントであり、パンや惣菜の盛り合わせ、また灘の日本酒の提供や神戸レザー、北区の茅葺も紹介された。

神戸の食のアピールとしては、少々弱いかなという印象を持ったが、オレゴン日米協会の関係者もたくさん参集され、神戸にゆかりのある方がポートランド市には結構おられることを強く感じ、また神戸市内の私立学校との英語交流プログラムを実施し受け入れをされている方々との出会い、神戸の子供さんにぜひポートランドに訪問してもらい交流を、とのご要望もいただいた。

アメリカとの学生の相互訪問については、姉妹都市であるシアトル市や今回訪問し MOU を再締結したポートランド市、また東部フィラデルフィア市を拠点に行う必要性を改めて感じたところである。

令和４年１１月４日

一、ファーンヒル・ウェットランド汚水処理施設庭園の視察

　神戸市建設局、都市局および神戸市造園協力会の関係者の皆様と上記ならびに下記施設を視察した。現地責任者であるジャレッドキナー氏とアメリカで日本庭園を作庭してこられた造園家栗栖宝一氏より、施設概要と庭園の説明、ツアーに参加した。この汚水処理施設での庭園とは、下水が処理され浄化された水が近隣の河川に流れ込む前に、栗栖宝一氏設計の庭園を通って新鮮な空気・酸素を含みながらテュアラティン川に注がれ、そこは７００エーカー（約２．９キロ平方メートル）という広大な敷地内に、処理場、庭園、湿地帯が存在している。当日は、生憎の雨であったがウォーターガーデンを視察し、野鳥の生息地にもなっていることも確認され、ナチュラルトリートメントシステムと呼ばれる一種のエコシステムが作られている状態であった。栗栖宝一氏からは、岩場の配置や川の流れ様など、いかに自然と結び付け感じられるものにするか、という理念についても解説があった。日本庭園的な箇所もあったが、全体としては「森」の印象が強く感じたが、そこはやはりアメリカならではのスケールによって得られるガーデンであったが、垂水区の平磯にある下水処理施設東部の地上部にある「なぎさの池」を連想させるところであった。

二、サンマリタン・レバノン・コミュニティ病院庭園の視察

午後からは、同じく栗栖宝一氏設計の庭園である病院の庭園を視察した。この病院は、ベッド数２５床という地域でも小さな病院であるが、この地域では個々の患者さんに質の高いケアを提供し、コミュニティ全体の健康を促進することに尽力され、特に癒しの環境に取り組むことに力を入れ、患者、訪問者、スタッフのための「癒しの庭」があることが特長であるとのことであった。また、この庭園を持つ病院を核として、元々はオレゴン州の片田舎であったレバノンという小さな町が、大学や一流のホテル、またコンベンションセンターまでもが立地することになり、発展を遂げてきたことも明記されることである。栗栖宝一氏か

らは、庭園の小道の幅や曲がり具合、階段の傾斜具合や岩と水との融合の様子など、自然から得られる癒しをいかに表現されたか、等について語られた。また患者さん、例えば、今までなら白いカーテンしか見ずに点滴を受けガンの手術を受けていたが、この庭を見ながら点滴や食事をすることになってからは、治癒の効果が大きく上がった、という事例も正式に報告された、との話も紹介された。

三、ボールダー・フォールズインにてプレゼンテーション

病院庭園の視察後、ボールダーフォールズインにて、栗栖宝一氏をはじめ栗栖グループより庭園についてプレゼンテーションが行われた。特に、Healing「癒し」という概念について解説された。つまり、人の心に作用するものを「NI」（Nature's Intelligence）と呼び、この NI こそが日本庭園の真髄ではないかと考え、実践して来られたことを訴えられた。ＡＩの時代にこそ、ＮＩが必要ではないかとの持論も展開された。また HealingGarden の効果やその必要性につい

ても、栗栖宝一氏独自の見解を披露された。

道中の車中では、栗栖宝一氏の紹介ビデオが流れ、途中に通ったオレゴン州立刑務所での事例も紹介された。それは、何十年も塀の中で暮らした囚人が、樹を見た時、その樹に抱き着いて離れなかったことが忘れられない光景であった、との話も紹介された。それは、自然の生き物に人間が何かの力やエネルギーを感じ、そして彼ら自身が「日本庭園を造りたい」と言ってきたとの事であった。

広くアメリカ人に日本庭園が受け入れられている実態を、第一人者である栗栖宝一氏より話を聴けたことは何より貴重なことであり、彼独自の深い自然観による造園ビジョンを感じることが出来た。

また、海と山に囲まれた我がまち神戸も、北区や西区を中心に自然が多く残されている点や、今後のカーボンニュートラル政策を含めポートランドで実践されている「庭園」の様子は、神戸のまちや BEKOBE を標榜する「人」の様子も、多々の要素が似通っているのではないかとも気付かされた。

今後、神戸のまちづくりに活かすためには、視察メンバーと引き続き協議をし、共通の価値観をいかに市民理解に繋げるか、が課題となることを想起させる視察となった。

（了）